



INTERVIEW

### 市民のかかわりを促すキーパーソンに聞く

木を植える体験ができるわけでもない現場ボランティアに年間 2,000 人もが集まる。一日 8 時間の単調な草取り作業にもかかわらずリピーターも多い。人が集まる魅力は何だろう？ 宮城の地元の声、企業・団体担当者の声をオイスカアドバイザーの小林が聞いた。



#### 手作りのプロジェクトに感銘

昨年 5 月の植樹祭に参加したときに高さ 22 メートルの高所作業車から現場を見ました。10 年かけて 100 本以上に 50 万本のクロマツを植える、しかも育苗、植栽、

育林を一括して行う壮大なプロジェクトでありながら、一人ひとりが手をかけた、いわば手作りのプロジェクトでもあることに感銘を受けました。

私は名取の内陸育ちですが、小中学生のころは夏に限らず海へでかけ、カニを捕ったりハゼ釣りをしたりもしました。親戚は松林で採れたキノコを届けてくれました。海は生活の一部になっていたのです。クロマツは名取の「市の木」でもあります。

#### 作業に気持ちも癒される

仙台空港で飛行機への給油を担う会社・パシフィックの鈴木賢司社長（58）は震災のとき、福岡で勤めていた。1 年後に現職に就きオイスカの活動を知ると、「空港やオフィスは海岸から 1 キロ。海岸林に守



株式会社パシフィック  
鈴木社長

られていたんだ」と気づいてボランティアに参加したという。「それまで、マツは自然に生えているものだと思っていたし、種まきもやってみてクロマツの種がゴマ粒ほどしかないことにも驚きました」

仙台の子ども時代、海岸は遊び場だった。「自転車できて泳いだり、7~8 人で銀玉鉄砲を撃ち合いながら松林を走り回ったりしていた」と懐かしむ。海岸林再生の作業には気持ちも癒される。「これから一生付き合っていけそうだ」という。

#### 名取市長 山田司郎（54 歳）

海岸林再生は ①白砂青松の景観を残す ②市民生活や農業を守る ③観光資源として活用する— の三つを基本方針にしています。閉上（ゆりあげ）のサイクルスポーツセンターの再建をはじめ、海だけでなく名取川や増田川、貞山運河、広浦などを一体にとらえて、水を生かした自然と共生する街づくりを進めることも大切だと考えています。

海岸林再生は全国からのボランティアに支えられ、着実に進められてきました。もちろん名取市民のみなさまの協力も必要です。山と海が川によってつながることで豊かな自然が育まれるということなどを知らせてもらい、市民全体に広くプロジェクトへの参加を促すような分かりやすい情報を市から出していきたいと思います。

機材の錆びなど直接的な影響は気にならないが、空港が霧に包まれる日は増えたという声はある。仙台空港は海岸林に最も近い企業の集まりでもあり、一体としてプロジェクトに貢献できればと考える。「防災機能だけでなく、将来は地元の若い人たちにとって楽しい場所になるような絵が描けるといいと思う。そのためのお役に立ちたいですね」

#### 復興は踏み出したばかりだと実感する

地元ミヤギテレビの情報番組「OH! バンデス」を担当している伊藤拓アナウンサー（45）は去年二度、海岸林再生の現場を訪れて番組をつくった。「最初は、とてつもないことだと驚きました。再生まで



宮城テレビ放送  
伊藤アナウンサー

果たしてどのくらい時間がかかるのだろう、少なくとも 50 年かかるだろうなあ」と。しかし、何年かかるプロジェクトであっても支え続けることこそ

が震災を風化させないことだとも思ったという。

話の中に「宝」という言葉がよく出てくる。海岸林は「地元の人びとの宝」であり「宮城の宝」であり、棲み処にしている「動植物にとっても宝」である、という具合に……。震災からの復興は、がれきの撤去など目に見えやすい時期が終わり、動きが目に見えにくくなっている。「でも、海岸林の現場に行けば復興はまだまだ踏み出したばかりだなと実感する。そういう話をスタッフとしました」

植樹祭にきた地元の高校生が「楽しい」と口をそろえていたことが印象に残っている。「楽しいからこそ長続きするし、若い人たちが宝を守る心意気を育んでいくことは、震災の風化を防ぐためにもとても大切ですから」

#### 草取りにもやりがいを感じる



東京海上日動  
火災保険株式会社  
鈴木さん

はじめて東京から海岸林の現場に来たのは 2015 年の雨の日だった。「地下足袋と雨合羽姿で、オイスカの方に褒められたんですよ」。東京海上日動火災保険 CSR 室の鈴木恵子さん（48）と高津戸さおりさん（44）は懐かしそうに話す。「地図を見て想像していたよりずっと広くてびっくりしました」



高津戸さん

同社は東南アジアのマングローブ植林事業でオイスカとの付き合いが始まった。培われた信頼関係が海岸林プロジェクトへのかかわりを通じた震災復興支援にもつながったという。二人の地下足袋は東南アジアで履き込んだものだったのだ。

全国から 20 人ほどが集まる年一回のボランティアツアーに加え、仙台勤務の社員は別に現場にやってくる。「労働力として期待されているし、作業の意味も説明してくれるので、ひたすら草取りであっても参加者はやりがいを感じています」

現場に赴いた役員が丁寧な説明を受けていることが、支援企業にとっては大切だという。「役員が自分の言葉でプロジェクトを語り、ファンになれば、事務局も仕事がやりやすい」からだ。

現場に赴いた役員が丁寧な説明を受けていることが、支援企業にとっては大切だという。「役員が自分の言葉でプロジェクトを語り、ファンになれば、事務局も仕事がやりやすい」からだ。



2017 年 5 月の植樹祭に参加した名取北高校の生徒

#### 仲間づくりや達成感につながる現場

加盟組合数 2400、総組合員 170 万人に上る最大の産別労組、UA ゼンセンからは昨年、全国からのべ 200 人あまりがボランティアとしてやってきた。2014 年から、参加人数は着実に増えている。

「自分たちの労働条件を上げるだけでなく、社会問題を私たち共通の課題としてとらえることが必要な時代、海岸林は長く震災復興にかかわることができる現場です。肉体労働だし仲間づくりや達成感にもつながるのは、組合向きでもあります」。教育・社会運動局の浅山哲也さん（43）は言う。

活動を通じて、新聞、テレビやインターネットでは分からないことを知り、「現場に携わって初めて自分の意見が言えるようになると実感した」という。自身も 5 回ボランティアに参加、クロマツの



UA ゼンセン  
浅山さん

苗の大敵でみんなが手を焼く頑固な下草、ツルマメを抜くコツも身につけた。

リピーターが増え、加盟するそれぞれの組合が独自にボランティアを派遣しようという動きも出始めている。「成果がはっきり見える分かりやすいボランティアだからですね」と解説してくれた。